西廂記または物語の謎解き

廣瀬玲子

はじめに

本稿は、唐代伝奇「鶯鶯伝」（一名「会真記」）、諸宮調『董解元西廂記』、元雑劇『西廂記』の読みくらべを試みたものである。「西廂物語」群の中のこれら三つの作品を、文学史という流れの上に位置づけるためにではなく、むしろ同じ平面の上に無造作に置いて読むこと。「鶯鶯伝」という一つの作品がどのように生まれ変わっていくか、「成長」するか、ではなく、それぞれが別個の作品としてどのように異なるのかを問うこと。しかもその違いを時代やジャンルの違いに還元せずに保留しておく仕方で。

そもそも本稿は次のような疑問によって導き出された。『西廂記』に関する近年の研究[1]は、なぜ版本問題に終始しているのか。『西廂記』を読み、その内容について書くことが、なぜ行なわれないのか。そのような研究はすでに終わったのか。しかしそれは終わりうるのか。

試みに『戯曲集（上）』（平凡社・中国古典文学大系52、一九七〇）の「解説」を、本稿で扱う三作品の紹介も兼ね

て、見てみよう。[2]

元雑劇の代表作としての「西廂記」の評価は、まったく異なる形体の歌劇が盛況を呈した明・清の世にも不動であった。それは一つには、この作品が元雑劇として異例の長篇を擁することと、より多く、「礼教に抗する自由結婚」をテーマとして、雅俗の調和をえた美しくかつ活発な表現により、みごとにテーマを活かした点にある。（四五六頁）

元雑劇「西廂記」の原拠は、はるかに唐代の文言小説、元稹（七七九―八三一）の『会真記』、一名「鶯鶯伝」にもとめられる。（……）封建礼教下におけるこの恋物語は、まず官僚士大夫の世界で採りあげられる。北宋の末年ごろ、詞人趙徳麟（一〇五一―一一〇七）により、はじめて語り物化の第一歩を踏みだしたのである。（……）ここで看過してならないのは、趙徳麟が語り物化する際に、原作の末尾に掲げる、女性観の変化にもとづく一方的宣言の部分が、すっかり削除せられた点である。（……）近人陳寅恪氏は『会真記』をさして「封建社会における不合理がおのずから暴露された作品」と評したが、語り物化に際しての趙徳麟の見解も、おそらくそれに近かったろう。ともかくも、元稹のつづる礼教下の美しい恋物語は、いちおうなにびとも共感しうる形で、以後しばらくは民間に潜入したらしい。（四五六―四五七頁）

それが十二・三世紀の交、金の章宗朝（一一八九―一二〇八）の人といわれる董解元により、〈諸宮調〉とよぶ語り物形体に編まれてふたたび世に現われたときには、もはや原作と見まがう成長を遂げて、「封建礼教に抗す

る自由結婚」という鮮明なテーマのもとに再編成された、波瀾重畳する「西廂物語」が誕生していた。「董西廂」と簡称される「西廂記諸宮調」がそれである。（四五七―四五八頁）

こうして、語り物「董西廂」において、テーマにもとづく主要人物の性格づけとストーリの構成を了えた「西廂物語」は、もはやほとんどそのまま戯曲化しうる状況にあった。それよりほぼ一世紀、「董西廂」は王実甫という真の知己を見いだして、元雑劇の舞台にはじめて「西廂記」が登場したのである。フル・タイトルを「崔鶯鶯待月西廂記」とよぶ。作者王実甫はもはや語り物のストーリにほとんど手を加える必要はなかった。かれの努力はもっぱら、この美しい恋物語にふさわしい、格調高くかつ生気にあふれた歌詞を生むことと、すでに語り物に定着をみた主要人物の性格を、テーマに沿ってより強調することに集中され、それがみごとな成功をおさめたのである。（四五八頁）

田中謙二氏の、まさに「格調高くかつ生気にあふれた」日本語訳に付されたこの解説が書かれて以来、『西廂記』の読解を試みた論考は皆無に近いのではないだろうか。確かに、田中氏の一字一句をも忽にしない読み、語学的正確さを厳格に求めた読みに基づいた、文学性豊かな翻訳は、ある意味で「読みの総仕上げ」と言えるだろう。しかし、ここで終わってしまってよいのか。引用した「解説」のように、封建礼教下の美しい恋物語である「鶯鶯伝」が、「封建礼教に抗する自由結婚」というテーマのもとに語り物『董西廂』として再編成され、このテーマに沿ってさらに歌詞の精錬と人物性格の強調を重ねて元雑劇『西廂記』へと成長した、と述べられた後では、もはや書くべきことはないのだろうか。そうであれば（あるいはそうでなくても？）、本稿は無駄なお喋りにすぎないであろう。それで

も敢えて喋り続けよう。というのも、「西廂物語」を一つのテーマの追求として、あるいはその発展としてとらえることに、抜きがたい違和感を覚えるからである。

戯曲を読むということ。例えば『西廂記』を読むということ。それは、劇全体の中で特定の位置を占める個々の「うた」や「せりふ」の響き合いに耳を傾け、その過剰なことばが辞書的な意味を超えて個々の具体的な場面のうちで為していることを把捉すること、常にその多くを取り逃しつつ、あせりのうちにそして陶酔のうちに把捉することではないだろうか。読むという行為は、このような「過程」を含んでいるのではないだろうか。そこでは「テーマ」はほとんど意味をもたない。われわれはいつも読んでいる途中であり、読み終わらないから。一つ一つの場面にこだわり、作品と向かい合いつづけるから。

「読んでいる途中」――それが、「読み終わった」地点で、しかも一連の「西廂物語」の頂点という価値を与えられた地点で、全体を見はるかし、「テーマ」という名付けを行なう読みとは異なる、本稿の読みの依拠する場所である。それは不安定な場所である。われわれをすりぬけてゆこうとすることばを、果してどれだけつかまえることができるのか。自信はないが、始めるとしよう。

一　「鶯鶯伝」の謎

唐代伝奇の一つである「鶯鶯伝」[3]は、謎めいた物語である。[4]それは、若い男女が旅先で出会い、密会するようになるが、やがて別れてそれぞれ別の人と結婚してしまうという話、このように言ってしまえばどこにでもありそうな話である。もちろん、文学作品はこのような要約によって十把一絡げにされるのを拒むだろう。だが、普通の場合それ

が、要約によって物語の枝葉が切り落とされることへの拒否であるとすれば、「鶯鶯伝」の場合はむしろ、切り落とすべき枝葉がないことによって、他の物語と同類であることを拒否する。そして、われわれの知り得ぬ部分を保持しつつ、われわれを突きはなすのである。

具体的に見ていこう。まずは、鶯鶯に関する謎。張生が鶯鶯に近づく手だてを紅娘に尋ね、その助言に従って春詞二首を送り、鶯鶯も「明月三五夜」と題する詩を返して寄こす、というあたりからの一段である。

①張大喜、立綴春詞二首以授之。是夕紅娘復至、持綵牋以授張、曰、崔所命也。題其篇曰明月三五夜、其詞曰、待月西廂下、迎風戸半開、拂墻花影動、疑是玉人来。張亦微喩其旨。是夕歳二月旬有四日矣。

①張大いに喜び、立ちどころに春詞二首を綴りて以てこれに授く。この夕紅娘また至り、綵牋を持ち以て張に授けて、曰く、崔の命ずる所なりと。その篇に題して明月三五夜といふ。その詞に曰く、月を待つ西廂の下、風を迎へて戸半ば開く、墻を拂ひて花影動き、疑ふらくはこれ玉人の来れるを、と。張もまた微かにその意を喩る。この夕、歳の二月旬有四日なり。

②崔之東有杏花一株、攀援可踰。既望之夕、張因梯其樹而踰焉、達於西廂、則戸半開矣。紅娘寢於牀、生因驚之、紅娘駭曰、郎何以至。張因紿之曰、崔氏之牋召我也、爾爲我告之。無幾、紅娘復來、連曰、至矣至矣。張生且喜且駭、必謂獲濟。

②崔の東に杏花一株あり、攀援して踰ゆべし。既望の夕、張因りてその樹に梯して踰え、西廂に達す。則ち戸半ば開く。紅娘牀に寢ぬ。生因りてこれを驚かす。紅娘駭きて曰く、郎何を以てか至れると。張因りてこれを紿きて曰く、崔氏の牋我を召せばなり、爾我がためにこれを告げ

③及崔至則端服嚴容、大數張曰、「兄之恩、活我之家、厚矣。是以慈母以弱子幼女見託。柰何因不令之婢、致淫逸之詞、始以護人之亂爲義、而終掠亂以求之。是以亂易亂、其去幾何。誠欲寢其詞、則保人之姦、不義。明之於母、則背人之惠、不祥。將寄於婢僕、又懼不得發其眞誠。是用託短章、願自陳啓、猶懼兄之見難。是用鄙靡之詞、以求其必至。非禮之動、能不媿心。特願以禮自持、無及於亂。」言畢、翻然而逝。張自失者久之、復踰而出、於是絶望。

④數夕、張生臨軒獨寢、忽有人覺之、驚駭而起、則紅娘斂衾携枕而至、撫張曰、「至矣至矣、睡何爲哉」、並枕

よと。幾もなく紅娘また来り、連に曰く至れり至れりと。張生且つ喜び且つ駭き、必ず済るを獲んと謂ふ。

③崔至るに及び則ち端服嚴容、大いに張を数めて曰く、「兄の恩、我が家を活かすこと、厚し。ここを以て慈母、弱子幼女を以て託さんとす。奈何ぞ不令の婢に因りて淫逸の詞を致せる。始めは人の乱を護るを以て義となし、終に掠乱して以てこれを求む。これ乱を以て乱に易ふるなり、その去ること幾何ぞ。誠にその詞を寢めんと欲すれば、則ち人の姦を保ちて、不義なり。これを母に明かさんとすれば、則ち人の恵に背きて、不祥なり。将た婢僕に寄せんとすれば、またその真誠を発するを得ざるを懼る。ここを用て短章に託し、自ら陳啓せんことを願へるも、なほ兄の難ぜんとするを懼る。ここを用て鄙靡の詞にて、以てその必ず至らんことを求めたるなり。非礼の動、能く心に媿ぢざらんや。ただ願はくは礼を以て自ら持し、乱に及ぶなかれ」と。言ひ畢はり、翻然として逝きぬ。張自失すること久しく、また踰えて出づ。ここにおいて望みを絶つ。

④数夕して、張生軒に臨みて独り寢ぬ。忽ち人あり、これを覚す。驚駭して起てば、則ち紅娘衾を斂め枕を携へて至

重衾而去。張生拭目危坐久之、猶疑夢寐、然而修謹以俟、俄而紅娘捧崔氏而至。

り、張を撫して曰く、「至れり至れり、睡る何をか為さんや」と。枕を並べ衾を重ねて去る。張生目を拭ひて危坐すること久しく、なほ夢寐かと疑ふ。然れども修謹して以て俟つ。俄かにして紅娘崔氏を捧げて至る。

ここでの鶯鶯（崔氏）の行動、特に③と④の間には、明らかな飛躍がある。が、それに対して物語は何の説明もしない。③で張生がへいを越えて西廂に行き、鶯鶯に叱責されたのが二月十六日、④で鶯鶯が紅娘に連れられてやってきたのが十八日である。鶯鶯はなぜやってきたのか、二日の間にどういう「心境の変化」があったのか、われわれはついそれを問いかけてしまうと同時に、その答えがないことを知らされるのである。われわれも、張生も、そして鶯鶯自身も、答えを知ることはないであろう。

さらに謎は前後に波及する。①で鶯鶯は張生に「明月三五夜」と題した詩を送る。「月を待つ　西廂の下、風を迎へて戸半ば開く。墻を拂ひて花影動き、疑ふらくはこれ玉人の来れるを。」そして、「張生もいささかその意味を悟った」とある。張生はこの詩の「旨」を「どうぞお越し下さい、待っています。」という「誘い」として受けとったのである。二日後（「既望之夕」）に西廂へと忍んで行くと（②）、果して「戸は半ば開」いていたが、その後は予期せぬ叱責が待っていた。鶯鶯はすきのない服装で顔色も厳しく張生を非難するのである（③）。「わたくしの一家を救って下さったお兄様のご恩は大きなものです。だからこそ、母も幼い息子や娘をよろしくとお願いしたのです。それを、よからぬ女中の手を借りて淫らな詩を寄こすとはどういうことですか。初めは人を「乱」から護ることを義とさ

れながら、結局は「乱」に便乗して手に入れようとなさるのですね。それでは「乱」をもって「乱」に易えるだけのこと、賊とどれほどの違いがあるでしょうか。本当は、お言葉をそのまま放っておこうかと思ったのですが、それでは人の悪をかばうことになって「不義」であり、母に打ち明けようかと思ったのですが、それでは人の恩を裏切ることになって「不祥」です。また、召使にことづけたのではわたくしの真意が伝わらない恐れがあります。そこで、短かいお手紙を届けさせて、わたくし自身の言葉で申し述べることにいたしましたが、なおもお兄様がわたくしの方を咎められるのをおそれ、下品な詩をお送りして必ずいらっしゃるようしむけたのです。礼儀に悖った行ないをなさってはずかしくないのですか。どうか礼儀にしたがって身を慎み、「乱」に及ぶことのありませんように。」

あまりにも理路整然としているがためにどこか不自然な非難である。が、ともかく、張生は呆然とし、すごすごと退散する。しかし、これは、張生が鶯鶯の計略にまんまとひっかかってお説教をされたというだけのことなのだろうか。そう言い切ってしまうとぬけ落ちてしまうものがないだろうか。それは、張生が理解したつもりであった「明月三五夜」詩の「旨」をめぐる謎といえるかも知れない。詩の「旨」は何であったのか。そもそも「旨」などあったのか。張生が考えた通り、それは「誘い」であったのだろう。ただ、張生は文字通り女から男への「誘い」と受けとったが、鶯鶯は結果的には、「誘い」を叱責のための手段として用いたのである。だが、鶯鶯が、「明月三五夜」の詩を送った時から張生をやりこめようと考えていたかどうかはわからないし、ここでの鶯鶯の非難のことばが、どれだけ「本心」（そういうものがあるとして）から出たものなのかも決してわからないのである。

また、鶯鶯のこの弁舌の力強さもわれわれを当惑させる。この個所より前、母親に無理やり宴席に呼び出されて張生に初めて会った時には、鶯鶯はほとんどことばを発しない。

常服睟容、不加新飾、垂鬟接黛、雙臉銷紅而已。顔色艶異、光輝動人。張驚、爲之禮、因坐鄭旁。以鄭之抑而見也、凝睇怨絶、若不勝其體者。問其年紀、鄭曰、今天子甲子歳之七月、終於貞元庚辰、生年十七矣。張生稍以詞導之、不對、終席而罷。

常服睟容、新飾を加へず、垂鬟黛に接し、雙臉紅を銷すのみ。顔色艶異、光輝　人を動かす。張驚きてこれが礼をなす。因りて鄭の旁に坐す。鄭の抑して見えしむるを以てや、凝睇怨絶、その体に勝へざるが若し。その年紀を問ふに、鄭曰く、今の天子の甲子の歳七月、終に貞元庚辰において、生年十七なり、と。張生稍詞を以てこれを導くも、対へず、席を終りて罷む。

さらに、張生と逢瀬を重ねるようになった後で鶯鶯の美点として述べられる奥ゆかしさの中にも、ことば数が少ないこと、が挙げられている。

崔氏甚工刀札、善屬文、求索再三、終不可見。往往張生自以文挑、亦不甚覩覽。大略崔之出人者、藝必窮極而貌若不知、言則敏辯而寡於酬對、待張之意甚厚、然未嘗以詞繼之。時愁艶幽邃、恒若不識、喜愠之容、亦罕形見。異時獨夜操琴、愁弄悽惻、張竊聽之、求之、則終不復鼓矣。以是愈惑之。

崔氏甚だ刀札に工に、善く文を属る。求索むること再三なれども終に見るべからず。往往張生自ら文を以て挑むも、また甚だ覩覧せず。大略崔の人に出づるは、芸は必ず窮極して貌は知らざるが若きなり。言は則ち敏弁にして酬対に寡し。張を待つの意甚だ厚く、しかれども未だ嘗て詞を以てこれに継がず。時に愁艶幽邃すれども、恒に識らざるが若し。喜愠の容、また形に見るること罕なり。異時独り夜琴を操り、愁弄

悽惻す。張竊にこれを聽き、これを求むれば、則ち終にまた鼓せず。これを以て愈これに惑ふ。

このような描写の間にあって、張生にお説教をするときのもの怖じしない態度と弁舌のさわやかさは唐突な印象を与えている。しかしそのどちらもが鶯鶯であり、鶯鶯は張生にとってもわれわれにとってもつかみどころがない。

謎めいているのは張生も同じである。張生はやがて、科挙受験のために蒲州を離れて都へ上り、翌年の試験に失敗して都にとどまることにする。鶯鶯には手紙を書いて説明し（手紙の内容は示されない）、贈り物を添えて送り、鶯鶯からも返事と贈り物の品々が届く（この手紙は全文が掲げられる[5]）。張生はその手紙を友人らに見せ、中には感心して詩を寄せる者もいた。ところが、張生は鶯鶯との関係を断ち切ってしまうのである。

然而張志亦絶矣。稹特與張厚、因徵其詞。張曰、「大凡天之所命尤物也、不妖其身、必妖於人。使崔氏子遇合富貴、乘寵嬌、不爲雲不爲雨、爲蛟爲螭、吾不知其所變化矣。昔殷之辛、周之幽、據百萬之國、其勢甚厚、然而一女子敗之、潰其衆、屠其身、至今爲天下僇笑。予之德不足以勝妖孽、是用忍情。」於時坐者皆爲深歎。

然れども張志また絶つ。稹　特に張と厚し。因りてその詞を徵す。張曰く、「大凡天の命ずる所の尤物や、その身を妖せざれば、必ず人に妖す。崔氏の子をして富貴に遇合し、寵嬌に乗ぜしめば、雲とならず雨とならずして、蛟となり螭となり、吾れその変化する所を知らざるなり。昔殷の辛、周の幽、百万の国に拠り、その勢甚だ厚し。然れども一女子これを敗り、その衆を潰し、その身を屠り、今に至るまで天下の僇笑となる。予の徳以て妖孽に勝つに足らず。ここを用て情

を忍ぶ」と。時に坐する者皆ために深く歎ず。

別れた理由として張生は、すぐれた女性というのは自らわざわいに会わなければきっと他人にわざわいをもたらすものであり、わたしのような徳の足らない者はそのわざわいに打ち勝つだけの力がないから、と語っている。果してこれは「理由」になっているのだろうか。張生は従来言われてきたように、女性観が変わったので鶯鶯を捨てる身勝手な男[6]なのだろうか。もしかすると、このように理屈をつけていただけかも知れないし、他人にはこのようにでも言うしかなかったのかも知れない。自分でも「本当の理由」など（それがあるのかどうかも）わからなかったのかも知れないし、あったとしてもそれは語りうるものであったかどうか。それゆえに、その場にいた者たちも、ことばを失って「深歎」したのではないだろうか。「深歎」を前野直彬氏は「心の底から感心した」と訳されている。[7]が、それほど明確な肯定・称賛を表しているのだろうか。むしろ、「どうにもならないこと」に対する深い歎き、二人がなぜ別れなければならないのかという思いと、でも別れるしかないのかも知れないという思いとが入りまじった、悲しみに近い感情にひたったのではないだろうか。張生もまた、説明されない（できない）心理をかかえているのである。

二人の主要な人物の謎は、そのままこの物語の謎である。二人の関係の始まりと終わりという二つの出来事が、そこへ至るまでの因果なしに突然起こり、前後に反響して新たに小さな謎を呼びおこしてゆくのである。確かに、語り手はこの話をする「意図」を次のように語る。

時人多許張爲善補過者。予常於朋會之中、往往及此意者、　時人多く張に許して善く過ちを補ふ者となす。予常に朋会の

夫使知者不爲、爲之者不惑。

中において、往往この意に及ぶは、それ知る者をして為さず、これを為す者をして惑はざらしめんとなり。

しかし、たとえ語り手がこのような教訓的な意図をもっていたとしても、語られたこと（物語）が秘かに語り手を裏切っているとしたら、それは語り手の統御の及ぶところではない。「教訓」という枠をぬけ出して、物語はひとり謎をいだきつづける。

二　『董西廂』という解釈

『董解元西廂記』[8]（以下『董西廂』と略す）は、芸人がうたったり語ったりしながら物語を繰りひろげる、諸宮調という語り物である。[9] この作品において、西廂物語はどのようなかたちを呈しているだろうか。

まず、前章でみた「鶯鶯伝」の謎がどのように解かれているか、あるいは解かれていないか、という視点から論じてゆこう。二つの大きな謎の第一は、鶯鶯が、二日前には厳しく叱責した張生のもとを訪れ、枕を共にするという出来事である。「鶯鶯伝」においては既述のごとく、何の説明もなくいきなり起こったのであった。『董西廂』の場合はどうか、筋を逐って見てみよう。

この「鶯鶯来訪」という出来事に至るまでの物語の運びは複雑になっているが、ともかく賊撃退後の謝宴までは、鶯鶯の心理は表現されない。この小宴は、「鶯鶯伝」では、ただ張生に感謝するためのもので張生と鶯鶯はここで初めて対面したのに対し、『董西廂』では、張生はそもそも旅の途中で見物に来た普救寺で鶯鶯を見かけ、一目惚れを

したために寺に泊まることにしたのであり、もともと鶯鶯との結婚を期待して賊鎮圧の策を出し、婚礼の宴のつもりで赴くのである。ところが思いもよらず、二人は夫人（鶯鶯の母親）に兄妹の礼を強いられる。この時の鶯鶯は、始めは宴に出席するのを遠慮したり、出席しても母親のとなりでうらめしそうに一点を見つめていたり、張生が話しかけても答えない、など、「鶯鶯伝」と同じようにはにかんでいる。張生は、夫人に裏切られた思いだが、酒の勢いにまかせて自分を売りこみ、夫人の再考を促そうとする。が、鶯鶯には亡き父親が決めた許婚があると言われ、うちひしがれる。

鶯鶯見生敷揚已志、竊慕於已、心雖匪石、不無一動。（巻三）

鶯鶯は張生が自分の気持ちを述べるのを聞いて、心中鶯鶯に思いを寄せていることがわかったので、心は転がる石ではないものの、些か動かずにはいられませんでした。[10]

つらい思いの張生に、鶯鶯はやや心動かされ、母親に、

休勸酒、我張生哥哥醉也。（同、雙調「月上海棠」より）

酒を勧むるなかれ、わが張兄さま、すでに酔ひたり。

と言って気遣いを見せる。ここは、初めて鶯鶯の心理が語られ、[11]そのことばが直接話法で述べられる個所なのである。

次の日、張生はもはや絶望と、長安へ旅立つ仕度をする。が、そこへやってきた紅娘が、旅の荷物の中に琴を見つけ、夜更けになったらお弾きなさい、鶯鶯はきっと心引かれてやってくる、と助言し、張生は踏みとどまる。紅娘の助言に従うと、果して鶯鶯は紅娘と共に張生の部屋の側まで行って耳を傾ける。紅娘の咳払いを合図に張生はここぞ

とばかりに心を込めて奏でかつ歌う。

其辭哀、其意切、悽悽然如別鶴唳天。鶯聞之、不覺淚下。（卷四）

その言葉は哀しく、その心は胸にせまり、寂しげなこと、連れと別れた鶴が空にむかって鳴いているかのようでした。鶯鶯は聞きながら、思わず涙をおとしました。

外の気配から鶯鶯の心をとらえたと確信した張生は、戸を開けて抱きすくめるが、よく見ると紅娘である。呆気にとられるうちに鶯鶯は帰ってしまう。

生問紅娘曰、鶯適有何言。紅娘曰、無他言、惟悽怨泣涕而已。妾逆度之、似有所動。今夕察之、拂旦報公。紅娘別生歸寢、鶯已臥矣。燭光照夜、愁思攪眠。

張生は紅娘に尋ねます、「鶯鶯は今しがた何と言っておられましたか。」紅娘答えて、「何も言わず、悲しみうらんで涙を流すばかりでした。わたくしの見当では心動いたはず。今晩様子を見て、朝一番にご報告しましょう。」紅娘が張生にお暇し部屋に戻ると、鶯鶯はもうやすんでおりました。ともしびの光は夜を照らし、愁いの思いは眠りをみだします。

【中呂調】【碧牡丹】

夜深更漏悄。
鶯鶯更悶愁不小。
擁衾無寢、

〔うた〕

夜はふけて　漏刻の音はひそやかに、
鶯鶯は更に愁ひを増すばかり。
衾いだけど寝ぬるなく、

心下徘徊籌度。
君瑞哥哥、
爲我吃擔閣。
你莫不枉相思、
枉受苦、
枉煩惱。
○適來琴内排喚着。
即自家大段不曉。
自心思忖、
怕咱做夫妻後不好。
奴正青春、
你又方年少。
怕你不聰明、
怕你不稔色、
怕你沒才調。
【鶻打兎】
奈老夫人、
情性惱、非草草。
雖爲箇婦女、有丈夫節操。

心にめぐらすはかりごと。
君瑞兄さま、
わがために苦しむや。
きみ　恋し、
苦しみ悩むとも、
なべてむなしからざらん。
○先刻　琴の呼びかけに、
世間知らずのわれなれど、
自ら心に思ふあり、
われら似合ひの夫婦（めをと）ならずや。
われ　まさに青春にして、
きみもまたまさに年若し。
きみ豈に聡明ならざらん、
美貌ならざらん、
才能なからん。
〔うた〕
いかんせん　母上は、
頑固もの、いい加減をば許すまじ、
女といへど、男の節操（みさを）。

俺父親、居廊廟。
宰天下、存忠孝。
妾守閨門、
些兒恁地、便不辱累先考。
○所重者、
奈俺哥哥、由未表。
適來恁地、把人奚落。
司馬才、潘郎貌。
不由我、難偕老。
怎得箇人來、
一星星說與、教他知道。

【雙聲疊韵】
夜迢迢。
睡不着。
寶獸沉煙裊。
枕又寒、衾又冷、
畫燭愁相照。
甚日休、幾時了。
强合眼、睡一覺。

わが父は、朝廷にありて、
天下を治め、忠孝をまもれり。
われ　深窓の箱入り娘、
一つとてまちがひあらば、なき父上のつらよごし。
○難題は、
いかんせん　兄さまの、いまだ名を揚げざる。
先刻かくのごと挑まるるも、
司馬の才、潘郎の貌あるお方とて、
われ如何ともしがたく、夫婦となれる望みなし。
一つ一つ説ききかせ、
かれに知らせる人もがな。

〔うた〕
夜は長く、
寝ねられず、
美しき獸かたどる香炉より　沈香の煙やわらか。
枕も寒く、衾も冷たし、
画燭は愁ひて相ひ照らす。
いづれの日にかやむべき、いつかは終はるべき。
強ひて眼をとぢ、眠らんとするも、

怎禁夢魂顛倒。
夜難熬。
○背畫燭、魆魆地哭、
淚滴了。
知多少。
哭得燭又滅、香又消。
轉轉心情惡。
自埋怨、自失笑。
自解歎、自敦搠。
眼懸懸地、盼明不到。

【尾】

昏沉的侍者管貪睡着。
業相的明月兒不疾落。
慵懶的雞兒甚不唱叫。

鶯通宵無寐、抵曉方眠。紅娘日之、不勝悲感。侵曉而起、以情告生。（巻四）

いかでか禁へん　夢は乱れて、
夜のいらだたしきを。
○画燭より顔をそむけて、ひそかに哭けり、
涙　滴ること、
多少ぞ。
哭けば燭も消え、香も尽き、
ますます心はむすぼるる。
ひとりで　うらみ、ふき出し、
ため息つき、のたうつのみ。
眼をこらし、夜明け待ち切れず。

〔うた〕

ねぼすけの召使　きっと眠りこけ、
憎らしき明月疾く沈まぬか、
なまけ雞　何故ときを告げざるか。

鶯鶯は夜通し眠れず、明け方になってやっと眠ったのでした。紅娘はこれを見て、悲しい思いでたまりません。朝まだきに起きて、事の次第を張生に報告しにまいります。

語り手は「碧牡丹」の曲の途中、「君端哥哥」から、次の曲「鶻打兎」まで、「我＝鶯鶯」として揺れる思いをうたう。他のうたも合わせて、この個所は専ら鶯鶯の心理を表現していると言えよう。

紅娘から、鶯鶯は張生を思って輾転反側していたと聞いて、張生は喜び、詩を作って紅娘にことづける。紅娘は部屋に帰るとそれを化粧台の上に置いておく。

鶯起理粧、見其簡而視之。

鶯鶯は起きて身づくろいをしようとして、手紙を見つけて読みました。

【仙呂調】【賞花時】

過雨櫻桃血滿枝。
弄色奇花紅間紫。
清曉雨晴時。
起來梳裹、
脂粉未曾施。
○把簡兒拈來擡目視。
是一幅花牋、
寫着三五行兒字。
是一首斷腸詩。

〔うた〕

雨あがりの桜桃の花　血のごとき赤　枝に満ち、
色を誇れる珍しき花　紅もあり紫もあり。
暁の雨晴れし時、
起き来たりて髪ととのへれど、
脂粉（べにおしろい）はいまだ施さず。
○ふみをばとりて目を走らせれば、
模様入りの便箋に、
書けるは三五行の文字。
これ一篇の断腸の詩なり。

低頭了一晌、
讀了又尋思。

【尾】

覷着紅娘道、
怎敢如此。
打脊風魔虔妮子。
這妮子合死。
臉兒上與一照臺兒。

照臺擧綬帶飛空、寶鑑響花塼粉碎。紅娘急躲過曰、死罪、死罪。詩云、相思恨轉深、謾託鳴琴弄。樂事又逢春、花心應已動。幽情不可違、虛譽何須奉。莫惡月華明、且憐花影重。（巻四）

しばしうつむきて、
読みてはまた思ひめぐらす。

〔うた〕

紅娘の方へふりむきいふことは、
「なんぞ敢へてなす　かくのごときこと。
この性悪なあばずれ下女め。」
この下女まさに死すべきか、
顔をねらひて鏡投げらる。

照台挙がりて綬帶空を飛び、宝鑑響きて花塼粉碎す。紅娘さっと身をかわし、「申し訳ありません、申し訳ありません。」と言いました。詩はこのようなものでした。「相思の恨み転深く、謾に鳴琴に託して弄ぶ。楽事また春に逢ひ、花心まさに已に動くべし。幽情　違ふべからず、虛誉　何ぞすべからく奉ずるべき。悪むなかれ　月華の明るきを、しばし憐れめ花影の重きを。」

このかなり露骨な詩を読んだ鶯鶯の反応は、ヒステリックな激怒である。紅娘を罵り、張生をけだもの呼ばわりす

る。そして、紅娘に今回だけは許すと言って、便箋に何か書きつけると張生に渡してくるようにと命令する。張生は、紅娘が泣き顔でやってきたのを見て驚き、わけを尋ねる。紅娘は有り体に答えるが、鶯鶯からの手紙を読んだ張生は、また有頂天になる。それは「明月三五夜」の詩で、張生は得々と紅娘に詩の意味を解説する。

紅娘笑曰、此先生思慕之深、妄生穿鑿、實無是也。言訖而去。生專俟天晩。

紅娘は笑って言います。「あなたは思いが募るあまり、でたらめな深読みをなさっています。きっとまちがいでしょうよ。」言いおわると帰りました。張生はひたすら日が暮れるのを待ちます。

張生はじりじりと夜を待ち、詩の通りに月光のもと、へいを越え、まず紅娘に咎められる。張生は自信満々で、鶯鶯がお招きになったのだから大丈夫、知らせてきておくれ、と頼む。

ここから後は「鶯鶯伝」そのままのお説教である。前章で③として引いた文がほとんどそっくり引用されているとさえ言える。そして――

張生去住無門、紅娘精神失色、　張生は進退きわまり、紅娘は心がくじけます。

精神失色。

【般涉調】【夜游宮】　〔うた〕

言罷鶯鶯便退。　言ひおはれば鶯鶯すぐに立ち去れり、

兀的不羞殺人也天地。　ああ　なんと羞づかしきこと。

怎禁受紅娘廝調戲。　なんぞ禁へんや　紅娘のからかひてかく言ふを。

道、成親也先生喜、喜。
○賤妾是凡庸輩。
詩四句不知深意。
只喚做先生解經理。
解的文義差、
爭知快打詩謎。（巻四）

「ご結婚ぞめでたけれ。
○われは無学な婢なれば、
詩四句の深き意味を悟らず。
張さんの経書学べるをあてにすれど、
文義の解釈的はずれ、
詩謎をさっと解けるはずもなし。」

「鶯鶯伝」と同じようなこの個所ではあるが、明らかな違いが指摘できるであろう。「鶯鶯伝」においては、ここ以前には張生に対する鶯鶯の心の動きは何ら描写されていない。片や、『董西廂』では、上に見てきたように、張生をあわれに思う気持ちが表現されており、紅娘にも気付かれている。その上で「明月三五夜」の詩で呼び出してお説教をするのはどうしてなのか、と問うとき、われわれはそこに少なくとも、鶯鶯の気持ちの分裂あるいは揺れを読みとることができるのである。

張生はまたへいを越えて帰り、なぜこんなにつらい目に会うのかと老夫人や鶯鶯を恨みつつ、いつしか眠りに落ちる。

生自此行忘止、食忘飽、舉措顚倒。不知所以、久之成疾。（巻五）

張生はこの時から、行けば止まるを忘れ、食べても満腹を感じず、でたらめなふるまいをするようになりました。どうしたことか、そのうちに病気になってしまいました。

老夫人は紅娘にお見舞に行かせる。と、張生はすでに気息奄奄、夫人と鶯鶯に見舞ってもらえないだろうか、と頼む。やがて夫人と鶯鶯がやってくる。

鶯撫榻謂生曰、兄之病危矣。
不識病甚、願速言之。

鶯鶯は寝台に手をかけて張生に言います、「お兄様のご病気はこんなに重くなられました。何の病気かおわかりでしょう。早くおっしゃって下さい。」

【黄鍾宮】【降黄龍袞纏令】

自與兄別來、
彷彿十餘日。
甚陡頓肌膚消瘦添憔悴。
儘教人問當、
不能應對。
眼兒裏空恁淚汪汪地。
○尚未知傷着甚物、
直恁不能起。
願對着夫人、
一一說仔細。

〔うた〕

兄上と会へるは、
十日余り前。
忽ちのうちに体はやせてやつれたる。
人が問ふても、
答ふあたはず、
眼はうつろにてかくのごとく涙あふるる。
○なほ知らず　何物に傷(やぶ)れてか、
ただ　起つもあたわざる。
願はくは母上に、
一つ一つくはしく説かれたし。

料來想必定是些兒閑氣。
白瘦得箇清秀臉兒不戲。

【雙聲疊韻】

有甚愁、消沈圍。
潘鬢慵梳洗。
眼又暝、頭又低。
子管裏長出氣。
細覷了、這病體。
好不忘、怎下得。
多應是爲我後恁地細思憶。
○何處疼、那面痛、
教俺沒理會。
管腹脹滿、心閉塞。
快請箇人調理。
便道破、莫隱諱。
到這裏、命將逝。
鶯鶯有箇藥兒善治。

【刮地風】

生曰、多謝伊來問當俺、
想ふに　きっと何かのお腹立ちにより、
徒らに　うるはしき顔のやせてやつるるならん。

〔うた〕

何の愁ひ有りてか、沈約の腰はおとろへ、
潘岳の髪は梳くも洗ふも慵き。
眼をつむり、頭をしづめて、
ただあへぐのみ。
つぶさに見れば、この病状、
脳裡に焼きつき、いかで忍ばん。
おそらくはわがためにあれこれ思ひ煩へるならん。
○いづこか疼く、いづこか痛む、
われにはわからず。
さだめし　腹は脹れて、心は塞がる、
急ぎて医者をよばん。
言ひたまへ、隠すなかれ。
ここに至れば、命はまさに逝かんとす、
鶯鶯がよく効く薬を持てるとも。

〔うた〕

張生曰く、ありがたし　きみのわれを見舞へる、

縱來後何濟。
自家這一場腌臜病、
病得來蹺蹊。
難服湯藥、不停水米。
不頭沉、不腦熱、
脈兒又沉細。
知他爲箇甚、
吃藥後難醫。

【尾】

妹子、夫人記相識。
多應管命歸泉世。
這病說不得悶懨懨一肚皮。

鶯曰、妾有小藥、能治兄心間鬱悶。少頃、令紅娘專獻藥至。
（卷五）

そして、夫人と鶯鶯が帰る途中、張生の部屋で人の倒れる音がする。急いで戻ってみると、張生は寝台の横に倒れ

されど今さら何にならん。
わがいまいましきこの病、
その症状ぞ奇しき。
煎じ薬は飲みがたく、水も米も受けつけず。
頭は重からず、熱も高からざるに、
脈はかすかになれり。
何故に、
薬飲みても医し難きぞ。

〔うた〕

妹よ奥方よ、われを忘れたまふなかれ。
おそらく命は冥途に帰せん。
この病、腹一杯の煩悶は言葉にできず。

鶯鶯は言いました、「わたくしにちょっとしたお薬があります。お兄様の心の憂さを晴らせると思いますので、しばらくしたら紅娘にお薬をとどけさせましょう。」

ていて息がない。紅娘が手当てをするとややあって息をふきかえし、医者が呼ばれて診察を受ける。が、衰弱した外見にもかかわらず病気は見つからない。医者が退出し、一人になった張生は、もう生きていても仕方ないと梁にひもをかけて首をつろうとする。ちょうどその時——

拽住的是誰、是誰。紅娘也。謂生曰、先生惑之甚矣。妾若來遲、已成不救。曰、鶯自覩郎疾歸、泣謂妾曰、鶯之罪也。因聊以詩戲兄、不意至此。如顧小行、守小節、悞兄之命、未爲德也。令妾持藥見兄。

ひきとめたのは誰でしょう、誰でしょう。紅娘でありました。張生に言うことに、「なんて馬鹿なことをなさるんです。わたくしの来るのが遅かったら手遅れになるところでしたよ。」続けて言うには、「鶯鶯さまはあなたを見舞って帰られると、泣いてわたくしにおっしゃいました。『わたくしがいけないのです。詩でちょっとお兄様をからかったせいでこんなことになるなんて。小さなことにこだわり小さな節義を守って、お兄様の命を損なうことがあっては、徳のある行ないとはいえませんね。』それでわたくしに、お薬を届けるようにとおっしゃったのです。」

【中呂調】【古輪臺】

那紅娘對生一一話行藏。
俺姐姐探君歸、

〔うた〕

かの紅娘は張生につぶさに経緯を話したり。
お嬢様きみを見舞ひて帰り、

愁入蘭房。
獨語獨言、
眼中雨淚千行。
良久多時、
喟然長歎、
低聲切切喚紅娘。
都說衷腸。
道、張兄病體尫羸、
已成消瘦、
不久將亡。
都因我一箇、
而今也怎支當。
我尋思、
顧甚清白救才郎。
○當時聞語、
和俺也恓惶。
遣妾將湯藥來到伊行。
却見先生、
這裏恰待懸梁。

愁ひつつ蘭房へ入り、
ひとりごちては、
眼に涙の雨しとど。
いつまでも、
長きため息つくうちに、
小声でそっと紅娘をよび、
胸のうちをすべて説けり。
いはく、張兄さまは病に衰へて、
すでにやせこけ、
まもなくはかなくならんとす。
すべてわれ一人によりて、
今やいかでか引き受くべき。
われ思ふ、
わが身の清白顧みず　才子を救はん。
○その時　聞けば、
われも悲しくなれり。
われをして煎じ薬もてきみがもとへと遣はすに、
きみに見えれば、
ここにて恰も梁に懸からんとす。

些兒來遲、
已成不救、
定應一命見閻王。
人好不會思量。
試覷他此箇帖兒、
有些湯藥、
教與伊服、
依方修合、
聞着噴鼻香。
久服後、
補益丹田助衰陽。

【尾】

一天來好事裏頭藏。
其間也沒甚諸般丸散、
寫着箇專治相思的聖惠方。（巻五）

いささか遅く来ましかば、
すでに助からず、
閻魔さまにごあいさつ。
きみ何ぞ愚かなる。
試みに見よ　この包みに、
煎じ薬あり、
きみがため、
処方によりて調合せる。
香は鼻をつきてかぐはし。
しばらく服せば、
精気養はれ　衰へし陽気回復せん。

〔うた〕

天ほどのめでたき事をば納めたる、
それは並の丸薬、散薬ならず、
書きたるは　恋わづらい専門の特効薬の処方なり。

紅娘によれば、鶯鶯は張生が頻死の重症であるのを見て責任を感じ、薬を届けさせた。鶯鶯は、自分が「明月三五夜」詩でからかったためにこんな事態になったのだ、とはっきりと認識したのである。しかし、「如顧小行、守小節、

悞兄之命、未爲徳也」「我尋思、顧甚清白救才郎」と言っておいて、ただ薬を届けるだけでは何かはぐらかされたようである。そこで語り手は得意げに種明かしをする。実はその薬は並み大抵の薬ではないが張生には一番効く薬、鶯鶯の詩だったのである。

張生遂展開、讀了鶯鶯詩、喜不自勝、其病頓愈。詩曰、勿以閑思想、摧殘天賦才。豈防因妾幸、却變作君災。報徳難從禮、裁詩可當媒。高唐休詠賦、今夜雨雲來。（巻五）

張生はすぐに開いて、鶯鶯の詩を読むと、たいへんな喜びよう、病気もけろりと直りました。詩に曰く、閑ろなる思想をもって、天賦の才を摧殘するなかれ。豈にはからん　妾が幸ひに因りて、却って変じて君が災ひとなるを。徳に報ひんとすれば礼に従ひ難く、詩を裁ちて媒に当つるべし。高唐　賦を詠むを休めよ、今夜雨雲来らん。

「明月三五夜」と比べて、かなりあからさまに意味が表れており、しかも今度は鶯鶯自身が到来する予告なのである。紅娘は、また前の手口でからかわれているのでは、と疑うが、張生は大喜びで急に元気を回復する。そしてその夜、ついに鶯鶯は張生のもとへ訪れるのである。

長々とたどってきたが、「鶯鶯伝」において隣接していた鶯鶯のお説教と初めての密会との間に、『董西廂』はこれだけの「語り」を費している。それは「鶯鶯伝」の相反する二つの出来事の間に脈絡をつける作業であり、鶯鶯の心理を時を逐って表現することによって成されたのである。さらに次の晩には、鶯鶯は張生にむかって自分の行いの「理由」を語る。

〔【正宮】】【應天長】

欲言羞懶顫聲訛。
多時方語、低謂、
粉郎呵、鶯鶯的祖宗你知麼。
家風清白、
全不類其他。
鶯鶯是閨内的女、
服母訓怎敢如何。
不意哥哥因妾病、
懨懨地染沉痾。
○思量都爲我咱呵。
肌膚消瘦、
瘦得渾似削、
百般醫療終難可。
鶯鶯不忍、
以此背婆婆。
婆婆知道、
除會聖、
雲雨怎得成合。

〔うた〕

言はんとすれどはづかしく声をふるはせ口ごもる、
しばしおきて、小声にて謂ふ。
いとしき人よ、鶯鶯の祖先きみや知る。
家風は清廉潔白にて、
全く他に類を見ず。
鶯鶯は箱入り娘にて、
母上の教へ　いかで敢へて従はざらん。
思ひもよらず　兄上われに因りて病み、
懨懨として長わづらひ。
○思へばすべてわがために、
身はやつれ、
すっかりやけこけ、
いかなる治療も効き目なし。
鶯鶯忍びず、
これをもって母に背けり。
母上知らば、
神わざならで、
雲雨のいかでかなはんや。

異日休要逢別的、　他日　別の人に逢ひて、
更不管負人呵。（巻五）　われにあっさり負くなかれ。

鶯鶯の行為は、こうして「説明」された。つまり、始めのうちは、張生というこの才能ある美貌の若者に心を動かされはするが、具体的な行動としてはむしろひどい仕打ちをしてしまう。そして、そのために命を落とさんばかりになった張生を救えるのは自分しかいない、というぎりぎりの瀬戸際で、自ら張生のもとへ赴いたのである。

「鶯鶯伝」における突然の出来事とその謎に、一つの解釈が与えられ、咀嚼され、消化された。あるいは、「鶯鶯伝」は、時間の流れに順って出来事を並べたストーリーでしかなかったが、『董西廂』は因果を、即ちプロットを備えていると言うこともできよう。(12)

さて、「鶯鶯伝」の大きな謎の第二は、張生からの決別である。しかしながら、『董西廂』においてこの謎は完全に消えた。正反対の結末である「団円」をもたらすという解決が選ばれたのである。『董西廂』は、団円に向けて一つ一つ障害をのりこえてゆく物語となった。とはいえ、張生が科挙受験のために上京する際の別離は、その時点での二人にとっては、決定的な別れにならないとも限らない。相思相愛の二人が離れているうちに疑心を抱くようになる経緯を、次章との関連上、ここで見ておきたい。

送別の宴もそろそろ終りになり、いよいよ張生が出立するという時、二人はまさに同じ悲しみを分ちあっている。

君瑞啼痕汚了衫袖、鶯鶯粉涙盈腮。一箇止不定長吁、一箇頓不開眉黛。君瑞道閨房裏保重、鶯鶯道途路上寧耐。

兩邊的心緒、一様的愁懐。（卷六・仙呂調「戀香衾」より）

離筵已散、再留戀應無計。煩惱的是鶯鶯、受苦的是清河君瑞。（卷六・大石調「驀山溪」より）

この対句の対称性は、そのまま二人の心の対称性であり、「両辺的心緒、一様的愁懐（二つの心に一つの愁い）」なのである。別れたのは晩秋、春に張生は三番の成績で及第し、鶯鶯のもとへ召使を遣わして知らせる。鶯鶯は喜ぶが、その後張生から何の音沙汰もなく秋になる。そこで鶯鶯は手紙と贈り物を都へ届けさせるが、その時贈り物の品々にこめた気持ちを述べつつ張生の心変わりを疑う。

【越調】【疊字三臺】

簪雖小、是美玉。
玉取其潔白純素。
微累纖瑕不能汚。
渾如俺爲汝。
俺爲汝心堅固。
你曾惜俺如珍、
今日看如糞土。
○紫毫管、未嘗有。
是九嶷山下蒼竹。
當日湘妃別姚虞。

〔うた〕

簪は小さけれど美玉にて、
玉はその清らかに白く、
少しの瑕もつかざるを取る。
あたかもわが　なんぢへの、
なんぢへの心の堅固なるがごとし。
きみかつてわれを惜しむこと宝のごとくして、
今日看ること糞土のごとし。
○紫毫の筆は、いとめずらしき、
九嶷山のふもとの蒼竹なり。
かの日湘妃　姚虞と別れ、

眼兒裏淚珠。
淚珠如秋雨。
點點都畫成斑、
比我別離來苦。
○瑤琴是你咱撫。
夜間曾挑鬬奴。
你悄似相如獻了上林賦。
成名也在上都。
在上都裏貪歡趣。
鎮日家耽酒迷花、
便把文君不顧。（卷七）

眼の涙は、
涙は秋雨のごと、
点点と皆画きて斑を成せり、
わが別離より苦しかりけん。
○瑤琴はきみ奏でて、
夜　われを挑発せる。
きみはまさに相如の上林賦を献ぜるがごと、
名を成せど都にて、
都にて楽しみを貪りて、
ひねもす酒に耽り花に迷ひ、
文君をば顧みず。

ところが、張生は鶯鶯が想像しているのとはちがい、病にふせっているのであった。翰林学士に任命されたものの着任できず、鶯鶯のもとへも行けず、一人心細い思いをしている。そして張生は張生で、鶯鶯を薄情と恨んでいる。

（【正宮】）【甘草子】
我佯呆。我佯呆。
一向志誠、

〔うた〕
われおろかなり、われおろかなり、
ひたすらに真心つくし、

不道他心趙。
短命的死寃家、
甚不怕神天折。
一自別來整一年、
爲箇甚音書斷絶。
着意殷勤待撰箇簡牒。
奈手顫難寫。（巻七）

かの人の不実ならんとは思ひもよらず。
薄情なる憎きひと、
何ぞ天の裁きも怕れざる。
別れてより丸一年、
何故音信絶えてなき。
心こめ　ふみ認めんとすれど、
いかんせん　手の顫へて写し難きを。

そこへ鶯鶯からの手紙と贈り物が届き、張生は手紙を読む。鶯鶯は、張生が病気であるのを知らず、心変わりと思っているのだとわかると、張生は悲しんで涙をこぼし、せつない気持ちになる。この誤解をとくために、病を押して帰らなければ、と思うのである。

われわれは、二人は共に心変わりなどしていないことを知っているのだが、二人は知るすべもなく、遠く隔てられたまま互いに気持ちがすれちがっている。別れの時点で二人が備えていた対称性がゆらいでいるのである。やがて、鶯鶯の元の許婚であった鄭恒が普救寺にやってきて張生は都で壻入りしたとうそをつくに至って、二人のすれちがいは極まる。が、そこへ張生が戻って来る。蟠りはすぐには解けないが、二人だけで話すうちに疑いも晴れる。夫人が鄭恒の言うことを信じて元通り鶯鶯と鄭恒を結婚させると決めてしまっていたので、二人は一緒に首をつって死のうとするが、紅娘と法聡（僧侶）に止められる。そして、法聡の提案によって、今や太守になっていた杜確（張生の友

人で、先に寺が賊に包囲された時に張生の手紙に応えて鎮圧してくれた将軍）の裁きをまって、二人はめでたく結ばれる。対称性は回復し、社会的承認をも得て、物語は終わるのである。

「鶯鶯伝」において、語り手は第三者という外の視点から、鶯鶯や張生の、発話されたことばや表にあらわれた行為のみを叙述している。裏を返せば、発話されなかったことやある行為の背後に潜む動機・理由は叙述されない。そのことによって人物たちは、ある種の唐突さ、とらえ難さを持ちつづけた。一方、『董西廂』においては、語り手の視点は人物たちの外にあるかと思えば内に入りこんで、ある時は「われ＝鶯鶯」として、またある時は「われ＝張生」として、人物の視点と一体化する。さらに、外か内かをはっきりさせない場合もあって、融通無礙なのである。それによって人物たちは心理を、動機・理由を得た。鶯鶯は、初めのうちこそ心の内を表さず謎を残しているが、次第に心理と行為とが因果によって関係づけられ、われわれに理解を迫る。張生はと言えば、初めから一貫して鶯鶯に恋い焦がれているさまが露になっており、もはや謎めいたところは全くない。期待しては裏切られ、[13]を繰りかえしても決して懲りないこの「風魔」は、あまりの一貫性のために、書生の枠をはみ出してむしろ「道化」に近くなる。その逸脱のもたらす「笑い」については、後で『西廂記』とともに論じることにしたい。

三　『西廂記』という戯れ

「鶯鶯伝」にも『董西廂』にも、作中人物以外の語り手が存在した。しかし、元雑劇『西廂記』[14]においては、登場人物がすべてである。人物たちが次々にその境遇・状況を語り、心の内を述べ、行動し、物語は動いてゆく。人物た

ちを鳥瞰し、時にはその内側にも入りこむことのできるような超越的な視点はもはやない。いや、あるとすれば、それは物語の外にいるわれわれの目だけなのである。

さて、『西廂記』は果して、語り物『董西廂』を「ほとんどそのまま戯曲化」したものにすぎないのだろうか。『董西廂』で、その心理を露にしていた張生と鶯鶯は、『西廂記』でまた新たな面を見せるのか、あるいは見せないのか。再び、まず鶯鶯に的をしぼって見てゆきたい。

〔紅云〕夫人着俺和姐姐佛殿上閒耍一回去來。〔旦唱〕

〔紅娘〕奥方様が、わたくしにお嬢様と本堂のあたりをぶらついてくるようにと仰せです。〔旦〈鶯鶯〉唱う〕

【幺篇】

可正是人値殘春蒲郡東。
門掩重關蕭寺中。
花落水流紅。
閒愁萬種。
無語怨東風。〔並下〕〔第一本楔子〕

〔うた〕

まさにこれ　人は残春に値ふ　蒲郡の東、
門は重関をとざす　み寺の中、
花は水の流れに落ちて紅く、
閒ろなる愁ひくさぐさに、
言葉なく　東風怨む。〔共に退場〕

『西廂記』では、鶯鶯は冒頭第一本楔子から心の内をちらと表す。「閒愁萬種、無語怨東風」は、漠然としてはいる

が、何か満たされない思いを暗示している。

やがて孫飛虎の反乱が起こり、賊は鶯鶯をさし出せば寺を襲わないと、条件を出してくる。鶯鶯は、この時までに何度か張生を見かけ、あるいは夜の花園で詩の応酬をして、すでに心ひかれている。

〔旦引紅上云〕自見了張生、神魂蕩漾、情思不快、茶飯少進。早是離人傷感、況値暮春天道、好煩惱人也呵。（第二本第一折）

（旦　紅娘をつれて登場）張さまにお会いしてから、魂がぬけたようにふわふわし、気分がくさくさして、食事もあまりのどを通りません。恋する者のさびしさに加えて、晩春の陽気、なんとつらいことでしょう。

ここで早くも鶯鶯は自分の気持ちを「離人傷感」とはっきり認識している。孫飛虎の要求を知ると、鶯鶯は、自ら犠牲になるしかないだろう、といいつつ、もう一つの案を出す。

【青歌兒】

母親、都做了鶯鶯生忿。
對傍人一言難盡。
母親、休愛惜鶯鶯這一身。
您孩兒別有一計、
不揀何人。
建立功勳。

〔うた〕

母さま、鶯鶯は不孝にも先立つさだめ、
一言では尽し難きこの思ひ。
母さま、鶯鶯のこの身を惜みたまふなかれ。
わたくしにもう一つ案があります。
何人なるとも、
勲立て、

殺退賊軍。
掃蕩妖氛。
倒陪家門。
情願與英雄結婚姻。成秦晉。

〔夫人云〕此計較可。雖然不是門當戸對、也強如陷於賊中。長老在法堂上高叫、兩廊僧俗、但有退兵之策的、倒陪房奩、斷送鶯鶯與他爲妻。〔潔叫了、住〕〔末鼓掌上云〕我有退兵之策、何不問我。〔見夫人了〕〔潔云〕這秀才便是前日帶追薦的秀才。〔夫人云〕計將安在。〔末云〕重賞之下、必有勇夫、賞罰若明、其計必成。〔旦背云〕只願這生退了賊者。〔夫人云〕恰才與長老說下、但有退

賊軍退け、
わざはひ掃ふ者あれば、
名門のわが家柄もて、
その英雄と婚姻結ぶを願ふては。

〔夫人〕この案はまだましじゃ。家柄がつりあわぬとはいえ、賊の手中におちるよりはずっといい。和尚様、本堂から大声でふれて下され。廊下の両側の僧俗のかたがた、賊兵を退散させる策のある方に、嫁入り道具は当方もちで鶯鶯を妻にさしあげますと。〔法本大声で言う、しばらくしてやめる〕〔末〈張生〉手をたたきながら登場〕わたしには賊兵を退散させる策がありますよ。どうしてわたしに聞いて下さらないのですか。〔夫人にあいさつする〕〔法本〕この書生さんは先日追善供養をご一緒させていただいたあの方です。〔夫人〕どんな策がおありですか。〔末〕重賞の下には必ず勇夫あらん、賞罰もし明らかなればその計必ず成らん、です。〔旦　背をむけて傍白〕この方が賊を退散させてくれますように。〔夫人〕和尚様と話を決めたところです。賊兵を退散させた方に

得賊兵的、將小姐與他爲妻。
〔末云〕既是恁的、休諕了我渾家、請入臥房裏去、俺自有退兵之策。〔夫人云〕小姐和紅娘回去者。〔旦對紅云〕難得此生這一片好心。（第二本第一折）

は娘を妻にさしあげます。（末）そういうことなら、わたしの奥さんをこわがらせないように、臥房へお引きとり願いましょう。わたくしにちゃんと賊を退散させる策がありますので。（夫人）鶯鶯、紅娘とへやへ戻っていなさい。（旦　紅娘に）この方のご好意、本当にありがたいわ。

『董西廂』では、賊を退散させる策は張生が自ら言い出すのであるが、『西廂記』では右のように、鶯鶯が自分との縁組みを褒美として策を募ることを提案するのである。しかも、張生がうまく手柄をたててくれることを願いつつ。この場面において、鶯鶯も明らかに張生に恋をしている。つまり、『西廂記』の張生と鶯鶯は、ほとんど最初から相思相愛の仲なのであり、われわれも双方の気持ちを明確に知り得ている。賊が鎮圧されたあとの謝宴の場面を見てみよう。張生はすでにやって来て、夫人との挨拶を済ませている。

〔夫人云〕紅娘、去喚小姐來、與先生行礼者。〔紅朝鬼門道喚云〕老夫人後堂待客、請小姐出來哩。〔旦應云〕我身子有些不停當、來不得。〔紅云〕你道請誰哩。〔旦云〕請誰。〔紅云〕請張生哩。〔旦云〕若請張生、扶病也索走一遭。〔紅發科了〕（第二本第四折）

（夫人）紅娘、鶯鶯を呼んで来て、張さまにご挨拶するように言いなさい。（紅娘　楽屋口に向って呼ぶ）奥方様が奥のお座敷でお客様のご接待です。お嬢様にいらして下さいとおっしゃっていますよ。（旦　答えて）わたくし体の具合がすぐれませんのでまいれません。（紅娘）お客様はどなただとお思いです。（旦）どなたなの。（紅

娘）張さまですよ。（旦）張さまなら、病をおしてでも行かなければ。（紅娘　おどけたしぐさ）

鶯鶯が登場してからの一節には、

〔紅云〕往常兩個都害、今日早則喜也。〔旦唱〕

【喬木查】我相思爲他。他相思爲我。從今後兩下裏相思都較可。（……）

（紅娘）今までお二人ともつらい思いをなさってきましたが、今日は幸いにもお喜びですわね。（旦唱う）

〔うた〕われはあの人を思ひ、あの人はわれを思ひ、今より後　二人の恋の病も癒えん。

と、鶯鶯自身のうたによって、二人の「相思」が「我相思爲他、他相思爲我」という対称性をもって表現される。したがって、老夫人が二人に兄妹の礼を強いたときにも、鶯鶯は、

他那裏眼倦開軟癱做一堆。我這裏手難擡稱不起肩窩。（「折桂令」より）

あの人はあちらで　眼を開くものうげにぐんなり項垂るる、われはこちらで　手ももち上がらず肩をささうる力もなし。

と、同じように打撃を受けた二人の様子をうたうのである。『董西廂』の鶯鶯が、あくまでも張生の気持ちに応えるというかたちで、徐々に心を引かれていくのとは、明らかに違う。

結婚の望みを断たれた二人は恋わずらいに苦しむが、そのさまも紅娘によって次のようにうたわれる。

【油葫蘆】

〔うた〕

憔悴潘郎鬢有絲。　　やつれし潘岳鬢に霜おき、

杜韋娘不似舊時。
帶圍寬清減了瘦腰肢。
一個睡昏昏不待觀經史。
一個意懸懸懶去拈針指。
一個絲桐上調弄出離恨譜、
一個花牋上刪抹成斷腸詩。
一個筆下寫幽情、
一個絃上傳心事。
兩下裏都一樣害相思。（第三本第一折）

杜韋娘は昔に似ず、
帶はゆるみて足腰ほそる。
ひとりはうとうと経史を読む気もなく、
ひとりはくよくよ針仕事するものうし。
ひとりは糸桐（こと）にて奏づる離恨のしらべ、
ひとりは花牋（かみ）にて練りたる断腸の詩。
ひとりは筆もて幽情を写し、
ひとりは絃もて心事を伝ふ。
二人は同じく恋わづらひ。

このような鶯鶯ではあるが、紅娘が張生から託された手紙を化粧箱の上に置いておくと、それを見つけて読むや、『董西廂』のように鏡を投げつけこそしないが、やはり怒るのである。

〔旦云〕小賤人、這東西那裏將來的。我是相國的小姐、誰敢將這簡帖來戲弄我、我幾曾慣看這等東西。告過夫人、打下你個小賤人下截來。〔紅云〕小

（旦）ろくでなし、こんなものをどこから持ってきたの。わたくしは相国の娘ですよ。よくもこんな手紙でわたくしをからかえたものね。こんなものを読みつけているとでもいうつもり。お母様に報告して、このあばずれの腰を打ってもらいましょう。（紅娘）お嬢様のお言いつけでまいりましたら、

姐使將我去、他着我將來。我不識字、知他寫着甚麼。

【快活三】

分明是你過犯。
沒來由把我摧殘。
使別人顛倒惡心煩。
你不慣、誰曾慣。

姐姐休鬧、比及你對夫人說呵、我將這簡帖兒去夫人行出首去來。〔旦做揪住科〕我逗你耍來。〔紅云〕放手、看打下下截來。〔旦云〕張生近日如何。〔紅云〕我則不說。〔旦云〕好姐姐、你說與我聽咱。（第三本第二折）

あの方がわたくしに持たせたのです。わたくしは字が読めませんから、何が書いてあるかなんてどうしてわかりましょう。

〔うた〕

明らかにお嬢様の罪なるに、
わけもなくわたくしを痛めつけ、
かへってひとの気持ちを損ぬ。
きみ読みつけずば誰か読みつけん。

お嬢様、お気持をお静め下さい。奥方様におっしゃるというのでしたら、わたくしこの手紙を持って奥方様のところへ自首しにまいります。（旦引きとめるしぐさで）おまえをからかったのよ。（紅娘）お離し下さい。腰を打たれますかどうか試してみましょう。（旦）張さまは近ごろ具合はいかがなの。（紅娘）申しませんわ。（旦）いい子だから、言ってきかせておくれ。

そもそも無理に頼んで張生の様子を見に行ってもらったにもかかわらず、鶯鶯は手紙を託されてきた紅娘を叱る。が、紅娘は一枚上手で、鶯鶯の心はお見通しである。それでも鶯鶯は意地を張って、張生とは兄妹の間柄でそれ以外の気持ちはない、と弁解し、張生にも手紙でその旨言ってきかせよう、とまた紅娘に使いを命じるのである。紅娘は、

小姐、你性兒忒慣得嬌了、有前日的心、那得今日的心來。（せりふ）

お嬢様ったら本当にわがまま育ち。この前のお気持から、どうしたら今日のお気持が出てくるんでしょう。

對人前巧語花言、沒人處便想張生、背地裏愁眉淚眼。（「鬬鵪鶉」より）

人の前にてはうまくとりつくろひ、人無きところにては張さま想ひて、こっそり眉ひそめ涙を落とす。

と、文句を言いながら張生に手紙を届ける。これまでの経緯と、紅娘のことばが明かすように、鶯鶯は思っていることと言うこととが裏腹なのである。それが極まるのが次の一段である。

意外なことに、紅娘が届けた手紙は、「待月西廂下」の詩で、張生は喜び、紅娘はばかばかしい思いをする。ところが夜になって張生がへいを越えて鶯鶯のもとへ赴くと、あてがはずれる。

〔末作跳牆摟旦科〕〔旦云〕是誰。〔末云〕是小生。〔旦怒云〕張生、你是何等之人。我在這裏燒香、你無故至此、若夫人聞知、有何理說。〔末云〕呀、

（末へいを跳び越えて旦を抱きしめる）（旦）誰です。（末）わたくしですよ。（旦怒る）張さま、あなたは何という方なんでしょう。お祈りしているところへわけもなくやってきたりして。お母様に知れたら、どんな言い訳がおありですか。

變了卦也。〔紅唱〕

【錦上花】

爲甚媒人、
心無驚怕。
赤緊的夫妻每、
意不爭差。
我這裏躡足潛蹤、
悄地聽咱。
一個羞慚、
一個怒發。

【幺篇】

張生無一言、
呀、鶯鶯變了卦。
一個悄悄冥冥、
一個絮絮答答。
卻早禁住隋何、
迸住陸賈。

（末）えっ、話がちがうぞ。（紅娘うたう）

〔うた〕

何故に媒人は、
心におそれをいだかざる。
ぴったり合ったご夫妻の、
心のたがふはずもなし。
われここにぬき足さし足、
そっと窺へば、
一人は恥じ入り、
一人は怒る。

〔うた〕

張さまは一言もなく、
あれっ、お嬢様はお心変わり。
一人はしょんぼり、
一人はべらべら。
隋何　すっかりおしだまり、
陸賈　息をころし、

叉手躬身、　両手を組みてかしこまり、
妝聾做啞。（第三本第三折）　啞に聾をよそほへり。

先に、二人の対称性そのままに用いられた「一個……、一個……」の形が、ここでは全くの非対称となっている。鶯鶯は、張生については、心の中で思っていることと言動とがどうしても齟齬をきたしてしまうのである。結局この場は紅娘がとりなし、鶯鶯は「二度とこのようなことをしないで下さい」と言い残して去る。

打撃を受けた張生は、もともとの病気が一層重くなる。翌日鶯鶯が、再び紅娘に、手紙を届けるように命じるので、紅娘はあきれてしまう。

〔旦上云〕我寫一簡、則說道藥方、着紅娘將去與他、證候便可。〔旦喚紅科〕〔紅云〕姐姐喚紅娘怎麼。〔旦云〕張生病重、我有一個好藥方兒、與我將去咱。〔紅云〕又來也。娘呵、休送了他人。〔旦云〕好姐姐、救人一命、將去咱。（第三本第四折）

（旦登場して）わたくしお手紙を書きました。処方箋だとだけいって紅娘にあの人のところへ届けてもらいましょう。病気はすぐに直るはず。（旦　紅娘を呼ぶ）（紅娘）お嬢様お呼びですか。（旦）張さまはご病気が重いんですって。わたくしにいい処方があるのでもっていっておくれ。（紅娘）またこれだ。ひとをだめにするのもほどほどになさいませ。（旦）いい子だから。人の命が救えるのよ。もっていってちょうだいな。

この、処方箋ということにしてある手紙は、実は、張生のもとを訪れる予告の詩なのである。この期に及んでも鶯鶯は紅娘に心中を見ぬかれるのを拒否する。張生に読んでもらえば紅娘にも内容がわかってしまうにもかかわらず。張生は、こんどこそは間違いない、と密会を心待ちにする。そして夜。

〔紅上云〕姐姐着我傳簡帖兒與張生、約他今宵赴約。俺那小姐、我怕又有説謊、送了他性命、不是耍處。我見小姐去、看他説甚麼。〔旦云〕紅娘收拾臥房、我睡去。〔紅云〕不爭你耍睡呵、那裏發付那生。〔旦云〕甚麼那生。〔紅云〕姐姐、你又來也。送了人性命不是耍處。你若又翻悔、我出首與夫人、你着我將簡帖兒約下他來。〔旦云〕這小賤人倒會放刁、羞人答答的、怎生去。〔紅云〕有甚的羞、到那裏只合着眼者。〔紅催鶯云〕去來去來、老夫人睡了也。〔旦走科〕〔紅云〕俺姐姐語言雖是強、脚歩兒早先行也。（第四本楔子）

（紅娘登場して）お嬢様はわたくしに張さまへの手紙を届けさせ、今宵逢いびきの約束をなさいました。あのお嬢様のこと、またうそをついてあの方の命に万一のことがあれば冗談では済みません。お嬢様のところへ行ってなんとおっしゃるか見てみましょう。（旦）紅娘、臥房（ねま）の支度をしてちょうだい。やすみますから。（紅娘）おやすみになったら、あの方はどうなるんですか。（旦）あの方って。（紅娘）お嬢様、またそれですか。人に命を落とさせたら、冗談では済みませんよ。また気が変わったとおっしゃるんでしたら、わたくし奥方様のところへ行って、お嬢様がわたくしに手紙を届けさせて張さまと約束なさったと白状しますよ。（旦）この子ったら意地悪ね、恥ずかしくて行けないわ。（紅娘）何が恥ずかしいものですか。あちらへ行ったら眼をつぶっていればいいのですよ。（紅娘　鶯鶯をせきたてて）さあ、まいりましょう。奥方様はおやすみになりました。（旦歩く）（紅娘）お嬢様は口では意地を張っていながら、足どりはいそいそとしていらっしゃるわ。

こうして二人はやっと、めでたく密会を遂げるのである。ここに至るまでの経過を考えてみると、『董西廂』において、初めは表現されなかった鶯鶯の心理が途中からかなり細かにしかもその変化を逐うかたちで表現されるようになったのとは違い、『西廂記』の鶯鶯はほとんど初めから張生への思いを表現している。ただその思いがなかなか言

動と一致しないのである。物語の運びも、『董西廂』では張生の病が鶯鶯の叱責によって生じたものであり、重態になるにつれて鶯鶯も自責の念においつめられてゆく、という因果関係による緊迫があったのに対し、『西廂記』では張生は叱責を受ける前から恋の病にかかっていてそれが重くなったのであるし、叱責と密会とは間を置かずに続いてしまう。つまり、ちょっとしたきっかけさえあれば、密会は今までにも起こりえたのであるが、偶まずっと引き延ばされてきた、その延期こそが描かれているのではないだろうか。

さて、後半部に移ろう。夫人はやがて二人の仲に気付いて紅娘を責めるが、逆に説き伏せられて結婚を許す。ただし張生が科挙に合格することが条件で、張生はただちに上京する。半年後、張生はみごと状元及第を果たし、心配しているであろう鶯鶯のもとへ手紙を送る。鶯鶯は別れて以来気がふさいでいるが、それは張生に会えないためであって、『董西廂』のように心変わりを疑ったりはしていない。折しも張生の召使琴童が、張生からの便りを届け、手紙だけで本人には会えない悲しみにひたりつつも、よい知らせを喜ぶ。そして、返事と贈り物を琴童に託して送り出す。この時にも鶯鶯は、

他那裏爲我愁。我這裏因他瘦。（第五本第一折「浪裏來煞」より）

とうたう。対称性は健在なのである。

琴童が都へ戻ってみると、張生は翰林院編修国史に任命されたが、病のため駅亭で療養していた。一人寂しく鶯鶯を思っていたところで、手紙を読み、一つ一つ意味のこめられた贈り物の品々を見て、改めて鶯鶯をいとおしく思う。やがて張生は河中府尹の職を授かり、普救寺に帰ってくる。すると、元の許婚鄭恒がでたらめを言って鶯鶯との結婚を横取りしようとしている。あぶないところであったが、杜確将軍の登場で、二人はめでたく団円するのであ

る。

以上、後半は、張生の上京、鄭恒の讒言によって引き延ばされた結婚をめぐって展開している。『西廂記』において、張生と鶯鶯とは一貫して相思相愛の仲であり、この関係に危機は訪れない。ただ、いくつかの内的・外的障害によって、密会がそして結婚が延期されるだけなのである。そこに緊張がないとは言えない。が、『董西廂』に時には漂っていたような切迫した空気は感じられないのではないだろうか。そのもう一つの要因として、最後に「笑い」をとりあげて論じたい。

これまでの引用によって、鶯鶯さえも笑いと無縁の存在ではないことがわかるであろう。一方、張生は、『董西廂』と同じく大きな期待をしてははぐらかされ、しかも少しも懲りない、やはり道化的人物なのであるが、『西廂記』ではさらにその度を増して、物語の本筋から脱線してまでも駄洒落をとばしたりする。例えば、第一本第二折、寺にやってきた張生が法本和尚と話をしていると、紅娘が亡き相公の法要の日をききにくる場面を見てみよう。

〔〈紅〉見潔科〕長老萬福。夫人使侍妾來問、幾時好與老相公做好事。

（……）

〔潔云〕二月十五日、可與老相公做好事。〔紅云〕妾與長老同去佛殿看了、卻回夫人話。

（〈紅娘〉法本にあいさつして）和尚様こんにちは。奥方様のお使いで、いつ旦那様の法要を営んでいただけるかききに参りました。

（……）

（法本）二月十五日に相公の法要を営みましょう。（紅娘）和尚様と本堂を拝見してから、奥方様にご報告しますわ。（法

〔潔云〕先生請少坐、老僧同小娘子看一遭便來。〔末云〕何故卻小生。便同行一遭、又且何如。〔潔云〕便同行。〔末云〕着小娘子先行、俺近後些。〔潔云〕一個有道理的秀才。〔末云〕小生有一句話敢道麼。〔潔云〕便道不妨。〔末唱〕

【快活三】

崔家女艶妝。
莫不是演撒你個老潔郎。

〔潔云〕俺出家人那有此事。〔末唱〕

既不沙、
却怎睃趁着你頭上放毫光。
打扮的特來晃。

〔潔云〕先生是何言語。早是那小娘子不聽得哩、若知呵、是本）張さん少し待っていて下され。愚僧はお女中どのとちょっと見に行ってきますので。（末）どうしてわたくしを袖になさいます。一緒に参りましてもよろしいでしょう。（法本）ではご一緒に。（末）お女中どのに先に行っていただき、わたくしは少し遅れて参ります。（法本）なかなかよくわきまえた書生どのじゃ。（末）一つ申しましてもよろしいですか。（法本）遠慮は無用じゃ。（末うたう）

〔うた〕

崔家の女　派手ななり、
老僧どのの気を引ける。

（法本）われら出家の身にどうしてそんなことが。（末うたう）

さもなくば、
何故そなたの頭より放つ光に流し目し、
かくも粋によそほえる。

（法本）なにをおっしゃいます。お女中に聞こえないからいいものの、もし知られたらなんと思われるか。（紅娘　本堂

甚意思。〔紅上佛殿科〕〔末唱〕

【朝天子】

過得主廊。
引入洞房。
好事從天降。

我與你看着門兒、你進去。〔潔怒云〕先生、此非先王之法言、豈不得罪於聖人之門乎。老僧偌大年紀、焉肯作此等之態。

〔末唱〕

好模好樣太莽撞。
沒則羅便罷、
煩惱怎麼那唐三藏。
怪不得小生疑你、
偌大一個宅堂。
可怎生別沒個兒郎。

に上る）（末うたう）

〔うた〕

おもて廊下を渡りゆき、
洞房のうちに引き入るる、
好事は天より降（くだ）れるぞ。

入口を見張ってあげますから、お入りなさい。（法本怒って）張さん、そのようなことは儒者の口にすべきことではござらん。聖人の門にあって、許されるとお思いか。愚僧はこの年じゃ、なんでそんなまねができましょう。（末うたう）

あまりに大仰なお腹立ち、
何もないならそれでいいんですよ、
何ぞ気色ばむ三蔵法師。
わたくしが疑うのは無理もない、
かくも大きなおやしきに、
何故ほかに男なく、

使得梅香來說勾當。　婢寄こして相談す。

〔潔云〕老夫人治家嚴肅、内外並無一個男子出入。〔末背云〕這禿廝巧說、

（法本）奥方様がきびしく家を治めるお方で、内外一人の男も出入させないのです。（末　背をむけて傍白）この坊主め、うまいことを言って、

你在我行。口強。　わが前にては意地を張り、

硬抵着頭皮撞。　必死になって突っかかる。

張生がしきりに法本をからかう場面である。「好事」ということばに二つの意味が掛けられていることが見てとれよう。[15]「好事」には、法要・法事という意味とよい事・嬉しい事という文字通りの意味とがある。最初に紅娘が亡き相公のための「好事」という時は前者、そのあと張生が法本をからかって「好事従天降」という時は後者を指している。この洒落をきいてしまうと、それ以後われわれは「好事」ということばに出くわす度に二つの意味を共に想起させられてしまう。そして、二つの意味が、一つは厳粛な宗教儀式、もう一つは男女の逢瀬と対照的であるために、一層おかしいのである。また、ここでからむ相手が、本来徳高くあるべき僧侶であり、しかも初めは「俺出家人那有此事」とかわしていたのに、そのうち本気で怒って、「老僧偌大年紀、焉肯作此等之態」と言ってしまうところなども笑いを誘う。真面目な書生という枠にはまらない張生とともに、法本も謹厳な僧侶という枠をうっかり踏みこえてし

まうのである。

さらに、張生には、あたかも自分を面白おかしく演出したがっているようなところがある。第二本第三折で、謝宴に招かれるのを待つ場面。

〔末上云〕夜來老夫人說、着紅娘來請我、卻怎生不見來。我打扮着等他。皀角也使過兩個也、水也換了兩桶也、烏紗帽擦得光掙掙的。怎麼不見紅娘來也呵。

（末登場して）ゆうべ奥方様は、紅娘にお招きにあがらせますと言われたのに、どうして来ないんだろう。めかしこんで待っているんだが。皀角（さいかち）も二個ほど使ったし、桶の水も二回ほどとりかえたし、烏紗帽はぴかぴかにみがいたぞ。紅娘はどうして来ないんだ。

やっと紅娘がやって来ると、はやる気持ちをおさえ、すまして尋ねる。

〔末云〕（……）請書房内說話。小娘子此行爲何。〔紅云〕賤妾奉夫人嚴命、特請先生小酌數杯、勿卻。〔末云〕便去、便去。

（末）（……）どうぞ書斎に入ってお話し下さい。お女中どの、何のご用でお見えになりましたか。（紅娘）奥方様のおいいつけでお招きに参りました。ぜひとも一献さし上げたいとのこと、ご辞退なさいませんよう。（末）すぐ行きます、すぐ行きます。

「小娘子此行爲何」と尋ねる落ち着きも、「請」の一言をきくが早いか消え失せて、「行く、行く」とせきこんで答えるのである。そして、

〔末云〕小生客中無鏡、敢煩小娘子看小生一看何如。

（末）わたくし旅の身で鏡をもっていません。身仕度をちょっと点検してもらえないかな。

と言って、紅娘にあまりに念入りな身づくろいを冷やかされるのである。

前章でも触れたように、確かに『董西廂』にも「笑い」の要素はあった。しかし、それはあくまでも物語の進行という一方向への動きを妨げない範囲での逸脱である。一人の語り手による物語は、ある程度の幅はあれ、一本の線上を進む形式とならざるを得ない。片や『西廂記』は、一人の語り手の統御はなく、複数の登場人物が相互にはたらきかけあう物語、つまり本筋から逸脱してもそれが破綻ではなく広がりに通じるような、線ではなく面の形式なのではないだろうか。大きな出来事と出来事との間を上述のような「遊び」で塡めているのが『西廂記』なら、『董西廂』はその間を別の小さな出来事で塡めている。実際、『董西廂』には、『西廂記』にはない出来事がいくつもある。先ず、巻二全部とも言うべき法聡と孫飛虎との一騎打ち、巻三で張生が謝宴の日を一日まちがえること、張生が謝宴のあとがっかりして旅仕度をすること、巻五で、お説教された晩、張生が鶯鶯の夢を見ること、張生が一旦寝台から落ちて死に頻すること、そのあと首をつろうとすること、巻六で、法聡が張生を部屋へよんでなぐさめること、そこへ鶯鶯が来て二人で首をつろうとすること、法聡が杜確の力を借りるよう提言することなどである。『董西廂』は常に前に進み、次の出来事を語ってゆかなければならない。だが『西廂記』はむしろ、しばしば進行を止めて、延期された結末までの時間の中で存分に戯れるのである。

おわりに

本稿は「西廂物語」の三つの作品「鶯鶯伝」『董解元西廂記』『西廂記』の読みくらべを試みてきた。

「鶯鶯伝」は謎めいた物語であった。鶯鶯と張生の心理が表現されず、あるいは表現されてもどこかわれわれを納得させず突き放すようにして、出来事だけが起こる、しかし美しさを失わない伝奇。

『董解元西廂記』は、鶯鶯がだんだんと張生に心引かれてゆく経過を因果をもって示すとともに、結末を団円にもっていくことで張生を一貫した「風魔」にした。そして、団円へと向かう線的な進行という制約の中で、できるだけ多くの出来事・はぐらかし・笑いを盛りこんだ語り物。

『西廂記』は、そもそもの始めからお互いに引かれ合っている張生と鶯鶯とが、どのように内的・外的障害によって団円を延期されるか、をめぐる物語であった。物語は時にはそれ自体の進行を止めて、脱線したりふざけたりして笑いをもたらしつつ、ゆっくりと繰りひろげられてゆく。その経過を楽しもうとする戯曲。

本稿は、一つのテーマを措定し、『西廂記』をその頂点に置いて「鶯鶯伝」からの上昇ととらえるのとは別の仕方で、三つの作品を読んでみた。もちろんこの三作品が「鶯鶯伝」『董西廂』『西廂記』の順に書かれたことは明白な事実であるし、ジャンルの違いもテキストを一見すればわかるように確かに存在する。しかし、ひとまずそれらを論拠にしないでおくこと。作品自体に語らせること。その試みは果してうまくいったのだろうか。

作品それぞれの相違、それは「成長」の結果ではなく、また単にジャンルの相違の表れでもなく、窮極的には「鶯鶯伝」の、『董西廂』の、『西廂記』の、特質とでも言うしかないものであろう。

このような視点による読みが「正しい」などと主張するつもりはない。ただ、もう一つの読みとして提示することが許されればと願うのである。

決して「全体」を手に入れることのできない「物語」に謎を、空白を見つけてそれを解釈し、補い、新たな物語を

作ること。それはいつでも行なわれていることなのかも知れない。けれども、それは常に一つの選択された解釈であり、われわれは「真相」を知り得たわけではないのである。

「鶯鶯伝」は今も謎を含んだままわれわれの前に、ある。静かに、ことば少なに。

1　井上泰山「日本における『西廂記』研究」（中国俗文学研究8、一九九〇）を参照した。なお、本稿は版本研究を無視あるいは否定しようとしているわけでは決してない。

2　引用文の傍点はすべて引用者による。

3　テキストには『太平広記』巻四八八所収「鶯鶯伝」（中華書局、一九六一）を用いる。

4　内山知也「鶯々伝の構造と主題について」（日本中国学会報42、一九九〇）は次のように述べる。

「鶯々伝」の場合、作品理解に必要な語句の解釈についても、いまだに解決されていないものがあり、ストーリーの展開については、明らかに作者の説明不足のため理解困難を招いている部分がある。過去の論及は根本的には殆どこに関係しているのであるが、それが成功しないために誤りが生じた。これらの基本的問題を解決するのが本論文の主なる目的である。（一五七頁、傍点引用者）

本稿は、このような「目的」をめざさない。理解困難な部分を、作者の説明不足に帰することはせず、むしろそれこそが「鶯鶯伝」の本質ではないか、という視点に拠る。したがって右のような「問題」は決して解決されない。従来の「問題解決」はほとんどがこの物語の時代的・社会的背景の中に答えを求めてきた。確かにそれで決着のつく問題もあるだろう。しかし、そのような方法ですべての問題が完全に解かれるわけではないし、かりに完全に解かれ、外部に還元しつくせるのであれば、この物語とは一体何なのであろうか。

5 「鶯鶯伝」全篇を通じて、鶯鶯の詩や手紙はその内容が示されるのに対して、張生の詩や手紙は詩題のみあるいは書いたということのみが示されて内容は明らかにされない。

6 田中謙二前掲「解説」など。

7 前野直彬編訳『唐代伝奇集』1（平凡社　東洋文庫、一九六三）所収、21「鶯鶯の物語」。

8 テキストには、凌景埏校注『董解元西廂記』（人民文学出版社、一九六二）を用いる。

9 現在見ることのできる『董西廂』のテキストが、実際に語られたものそのままであるかどうかは疑わしい。傅田章「董西廂版本ノート」（東京大学教養学部外国語科研究紀要34―5、一九八六）に述べられるように、『董西廂』の版本は「実際の演唱も早く衰退し、諸宮調というジャンルそのものの理解さえ半ば忘れられ、張羽や張大復の記録するように一時は伝本もまれになったというような条件のもと」（五十一頁）で刊行されたもので、「書物という形（それもかなり立派な造りのもの）をとってすでに〝案頭の文芸〟なのであ」る（四十八頁）。本稿は「西廂物語」の一つのかたちとして『董西廂』というこの語り物形式の作品を扱うため、これがどれだけ実際の語り物の性格を残しているか、といった問題には立ち入らない。

10 以下『董西廂』を訳出するにあたっては、Li-li Ch'en, Master Tung's Western Chamber Romance (Cambridge University Press, 1976) の英訳を参照した。

11 ここより前に詩の応酬をするが、直接的な心理の表現とは見なさない。

12 「鶯鶯伝」の空隙が『董西廂』によって説明され、塡められていることは、田中謙二「文学としての『董西廂』（上）」（中国文学報1、一九五四）の一〇四頁、Li-li Ch'en 前掲書の "Translator's Introduction" の xi―xii 頁でも指摘されている。特に後者は本稿と重なる部分があることを附言しておく。

13 田中前掲論文は、この語り物のおもしろさは、張生の期待（聴衆の期待でもある）がくり返しうらぎられる点にあると

し、「期待はずし」の複雑なつみ重ねによるストーリー推進の洗練された巧みさが、この作品の文学としてすぐれた第一の点である、と述べている。

14　テキストには、王季思校注・張人和集評『集評校注西廂記』（上海古籍出版社、一九八七）を用いる。訳出にあたっては、田中謙二前掲書の翻訳を参照した。

15　毛奇齢はこの個所に「好事、借上做好事作謔、最妙」と注している（『毛西河論定西廂記』）。